

## 大谷先生の印象

米田仁紀

電気通信大学レーザー新世代研究センター

yoneda@ils.uec.ac.jp

平成 28 年 1 月 4 日

大谷俊介先生は、我々のレーザーセンターに、多価イオン研究の国内外の中心となる研究拠点を作られました。その際、レーザーセンターという箱の中に、どうやって多価イオンの分光学といった特異な研究を入れるか？また、それをどのように活用して国内外の研究者を支援するか？等、強い力でいろいろな方面を動かし、働きかけをすることが必要な局面が多々あったと思うのですが、拝見していた限りではそのような面を見せることはなく、大変柔らかい先生だなあという印象を受けていました。

そんな大谷先生について、私が不思議に思っていたひとつが、事あるごとに多くの共同研究者が大谷先生のところに集まっていることでした。なぜ、大谷グループはあのように人を集められるのだろう？扱っている科学研究の種類の差なんだろうか？それとも、研究者コミュニティの差だろうか？と想像しつつ、うらやましくて、なにか手法があるなら教えてほしいとも思っていました。まあ、この答えは、大谷先生のお人柄そのものにあっただけなのですが、はじめのころは疑問符のてんこ盛り状態でした。

あるとき、自分の関係する研究論文を検索していて、先生が昔プラ研時代にされた、レーザープラズマで分光した実験研究の論文をみつけて、非常に親しみを覚えてお話を伺ったことがありました。“よくわからなかったけど、面白かった”を現在の EBIT 研究まで発展させたパワーを改めて感じました。その話をしたせいか、その後、先生がプラ研時代に使っていた真空紫外分光器を始め、いくつかの装置をいただきました。右から左へなんでも動かせる人なんだと驚きつつ、でもなぜそんなことができるのだろうか？と相変わらず不思議に思っていました。

先生と私の共通点のもう一つは、サッカーでした。“東京代表で活躍していた”とお聞きした時は、失礼ながら、まさか、と思いましたが、その後うかがっているうちに、どうやら、私が現在所属しているサッカークラブの関連チームに、シニアメンバーになってからもおられたことがわかりました。“いやあ、僕は飲み会専門で、夜にしか呼ばれないから”と謙遜されつつ、“昔はボレーでシュートを打ってた”ともおっしゃり、どっちが本当なんだろう？と面食らいましたが。

また、あるとき、私のところの超短パルスレーザーの装置を見て、“ああ、これ面白いね、僕も定年になったら、自分で買ってやってみようかな”、と大真面目に言われたことがありました。その装置は1億円程度したものだだったので、うーん、このひとなに考えてるんだろう？と頭のなかが疑問符でいっぱいになりました。きっと、“興味が先、そのあとは笑顔で人に接しながらそのアイデアを示していけば、何とかなるでしょう”という先生独自の考えで言われたことだと思いますが、先生の研究手法の一端を見た気がしました。

電通大をご退職後も、センターでお顔を拝見することが多々ありました。そのせいか、ああ、まだここには先生がいるから安心だと思っていました。私の部屋からはセンター7階の廊下がよくみえるのですが、今でもふと、先生がエレベータから歩いて出てこられるような気がしています。そんな雰囲気をおもちのかたでした。ありがとうございました。